



Title	鳳山区紅毛港保安堂について
Author(s)	前川, 正名
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 213-224
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58698
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

鳳山区紅毛港保安堂について

一、はじめに

台湾南部の大都市、高雄市の南部に草衙という地下鉄の駅がある。そこから二十分ほど歩くと鳳山区紅毛港という場所にたどり着く。新興住宅地として開発が進んでいる地域であり、その一角に少しばかり趣の違う廟が存在する。名を「保安堂」という。（図1）

隣接する「海衆廟」は、独特の強い曲線を描く屋根の上に龍や神々の飾りが過剰に附された、いかにも台湾的な廟である。しかし、この「保安堂」は紺色の屋根であり、独特のカーブもなく、瓦葺きの一般家屋のような作りに近い。台湾の廟建築をベースに、日本の神社仏閣や一般家屋の様式を混在させたような姿とでも言えばイ

メージしやすいであろうか。そして、その裝飾には、銃を構える水兵の像や海軍旗を思わせるパーツや菊の紋章等が用いられ、廟の側面を飾る壁画の類も、日本を想起させるものが多数奉納されている。

中に足を踏み入れると、外壁と同じように日本を題材とする壁画の数々、そして何よ

前川正名



図1 保安堂（現在・鳳山区）

り、日本式の神輿が置かれていること、さらに、軍艦の大型模型が奉納されているのが目につく。また、神像に視線を向けると、主神のうちの一体は、白い詰め襟を着用し、手にはサーベルを持つ、近現代の軍人の容貌をしている。

後述するように、この廟の異質さは、日本に関係がある故に生じており、日本と関連があるからこそ、ガイドブックにも載らない程の知名度でありながら、少数だが一定数の、日本からの参拝客が絶えない。どうしてこのような廟が台湾に存在するのか、筆者の二〇一三年十二月からの調査をもとに簡単に紹介していきたい。

二、保安堂小史

まずは、この保安堂について、背景となる紅毛港の歴史から簡単に述べていくことから始めたい。ただし、保安堂に関しては、わずか数十年程度の歴史にもかかわらず、保安堂が公表したいくつかの「簡介」でも、異なる部分が見られ、廟の役員等に尋ねても、毎度わずかに異なる回答が出てくる。そのため、筆者が情報を総合し、できるだけ時系列に沿って、整合性を持たせたものを表記する。

紅毛港の歴史

それでは、紅毛港について説明したい^(注1)。

鳳山区紅毛港は、海に面していないにもかかわらず、港の字が附されている。その理由は、元々、紅毛港は高雄港に面した漁師町であり、高雄市小港区紅毛港に位置していたからである。小港区の紅毛港（鳳山区への移転前）は、紅毛の名が示すとおり、かつてはオランダとの交易の拠点であったという。その後、ボラを捕る漁師が冬期の住居として利用するようになり、漁師達の仮住居として発達していく。漁師故に信心深い土地柄となり、廟が多数造られていた地域である。保安堂もそこに数多くあった廟の一つである。

戦後、紅毛港は漁業や海老の養殖等で栄えたが、海老の伝染病による養殖業への打撃等で、経済的な苦境に立たされる。公害問題もかさなり、民国九十六年（二〇〇七）の中央政府政策「南星計画」によって、紅毛港住人の大半が、小港区から鳳山区に移住することとなった。そして住人の移住とともに各々の廟も移転・新築することになった^(注2)。

なお、この地域（小港区）は、「六大廟宇」と呼ばれる六つの廟を中心に地域が造られていた。六大廟宇とは、その名の通り紅毛港を代表する六つの大廟で、広東

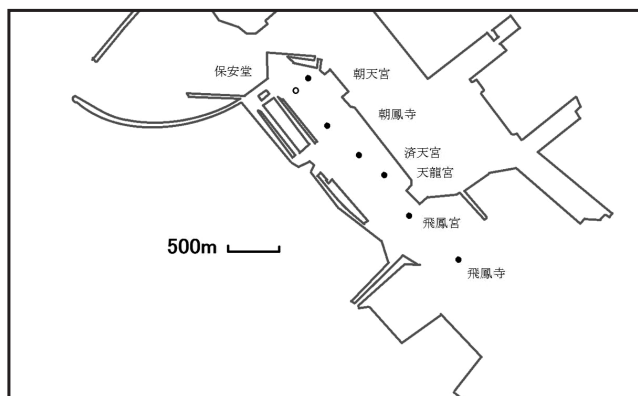


図2 A 紅毛港六大廟宇旧住所（小港区）での配置
（地形は現在のものグーグル地図およびグーグルアースにて確認2015.03.01）



図2 B 紅毛港六大廟宇現住所（鳳山区）での配置（同）

出身者の廟と紅毛港の五大姓（楊、呉、李、洪、蘇）の宗廟からなる。紅毛港内では比較的歴史も古く大規模な廟であり、その地区を象徴するように建っていたが、移転後の現在（鳳山区）、その位置は乱れている（図2 A・B）。

保安堂の主祀神

次に、保安堂について述べていきたい。

民国十二年（一九二三、当時は日本統治時代）に、大腿骨一本を海中より拾い、「郭府千歳」として、保安堂の前身となる小さな祠を海辺に作り奉納したのがその始まりである（注3）。

また、台湾に移り住んできた身寄りのない陳某なる人物が住んでおり、死後、「宗府元帥」として先の祠に祀った（民国二〇年代・一九三〇年代）。

さらに、民国三十五年（一九四六）に頭蓋骨一個を海中より拾い、「海府尊神（後の海府大元帥）」として祀った（注4）（図3）。

そして、その後、大漁が続いたため、これら三柱は靈驗あらたか



図3 神像(左から)宗府千歳、郭府千歳、海府大元帥

でありながら、小祠のままではなく、一定規模の廟に拡大し現在に至るところが、やや特殊なケースと言えるであらう。

また、その神像の材料にもいわれがある。この三柱の神を祀ってしばらくして、基隆外海にて漁をしている時に、大きな「樟木」(くすのき)が網にかかったという。三度捨てたが三度網にかかったため^(注5)、港に持ち帰っ

な神様であるということで、民国四十二年(一九五三)に「保安堂」が建立された。

この三柱が主な神であり、以上が、簡単な保安堂の紹介となる。多種多様な神が存在する道教ではあるが、主要な神がすべて行き倒れの類

た(年代不詳。推測するに、三柱を祀った一九四六から、保安堂として独立する一九五三年の間)。その後、先の三柱の神の神像を作ろうという話になった時、この流木が偶然にも、ちょうどよい大きさであったという(樟木は神像の材料に用いられる一般的な木材である)。なお現在は、この三神のほか、福德正神(土地神の一種)、地藏王菩薩、虎爺將軍(土地神の乗り物)を祀っている(後述)(図4)。

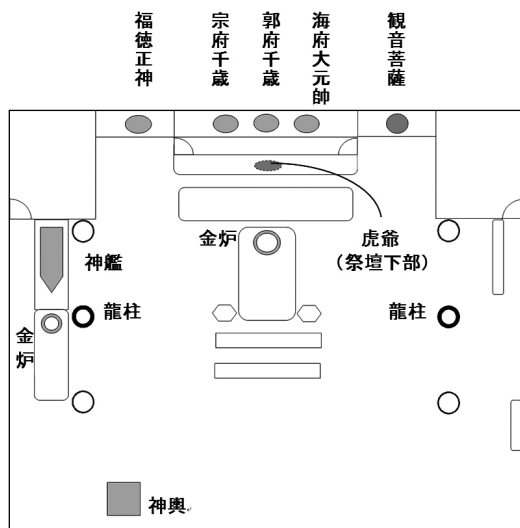


図4 保安堂神明配置図

保安堂の改築

また、保安堂は、幾度かの改築を経ている。

【黎明期】

民国十二年（一九二三）より民国四十二年（一九五三）までの、名も無き祠の時期である。民国四十二年の建立以前は、海辺の小さな祠であり、特に名前はなかったようである。「簡介」によつては、「海衆廟に骨を祀つたところ大漁が続く云々」となっているものもあり、この小さな祠が海衆廟の管理する小祠の一つであつたとするのが最も穏当な解釈であろう。なお、海衆廟は、海難者を供養する廟であり、小港区の時代は三十余の小祠を管理していたという。

【第一期】

先に述べた民国四十二年（一九五三）の、連年の大漁をきっかけとする「保安堂」の建立である。

【第二期】

次は、民国五十七年（一九六八）頃の出来事をきっかけとする一連の拡張工事である。蘇某という老漁師が漁に出た船上にて休憩していると、夢を見たという。そしてその夢の中に「海府尊神」が出てきて、祠を建て替えて欲しいと語り、砂浜の「亀の穴なる場所」を指定したという。

蘇老人が、指定された場所を掘ると亀の卵が出てきたため、神託通りであるとして、拡張工事に掛かることになった。民国六十三年（一九七四）、旧保安堂の規模になった。福德正神、地藏王菩薩等の主要三神以外の神も祀られるのはこの頃である。

また、民国七十九年（一九九〇）には、日本語の全く話せない童尻（タンキ）が、流暢な日本語を話したし、「私は日本第三十八号軍艦の艦長であり、太平洋戦争中に死亡した。日本の護国神社に帰りたい。」と言つたという^{注6}。

信者達は半信半疑であつたが、神諭の指示に従い、沖縄県の護国神社を訪ねたところ、「日本海軍記念碑」に「第三十八号軍艦」が撃沈された記録を発見した。

そこで、調査を終えた信者団が台湾に戻つた後、民国八十年（一九九一）農曆一月九日に高雄市哈瑪星（地名）の造船職人に依頼して、軍艦の大型模型を作らせ、農曆四月五日に「海府大元帥」の御座船として奉納した^{注7}。こちらにも「第三十八号神艦（38にっぽんぐんかん）」として崇拜対象となっている。（図6）

そして、農曆三、六、九、十三、十六、十九、二十三、二十六、二十九日の早晚定時（早朝六時と夜五時）に日本の国歌と軍艦マーチを流している。また、農曆八



図6 神艦（38につぼんぐんかん）

月八日をはじめとして主要な神の生誕日等も祭典を行なっている（移転後も同じ）。

【第三期】

その後、先述のように、元来この廟は高雄港に面した漁師町、小港区紅毛港にあったのだが、民国九十六

年（二〇〇七）、中央政府の政策により、紅毛港住人の大半が、鳳山に移住することとなる。そのため、この保安堂も移転されることとなった。なお、旧紅毛港の一部は、遊覧船の発着場や小規模の歴史博物館を備えた公園となっており、観光地化している。

そして新廟の完成した民国一〇二年（二〇一三）十二月二十八・二十九日の落成記念式典には、高雄市長の陳菊氏も参列し、民国一〇三年（二〇一四）一月四日の祝賀晩餐会には二千五百名が出席した。

三、第三十八号哨戒艇小史

それでは次に、海府大元帥の御座船の原形と目される「第三十八号哨戒艇」について、述べていきたい。

沈没前後の状況を知る資料は、アジア歴史資料センターにて、重要な部分が公開されているため^{（注8）}、こちらを主要な手がかりとし、軍事専門一般書等を補足資料として^{（注9）}、述べていきたい。

「第三十八号哨戒艇」とは、初めから哨戒艇という船として建造されたものではなく、旧式艦艇の転用にて哨戒艇となったものである。

元は、縦（もみ）型（二等）駆逐艦の「蓬（よもぎ）」である。縦型駆逐艦は、一九一七年（大正六）の八四艦隊計画で十八隻、一九一八（大正七）年度追加予算（八六艦隊計画）で三隻、計二一隻建造された艦であり、この蓬は、八六艦隊計画で建造された艦である。「艇」という文字により、モーターボートのような小型船舶を想像しがちであるが、百数十名が乗り込む中型駆逐艦であり、決して小さくはない。石川島造船所で建造（一九二二年（大正十一）八月十九日竣工）され、一九四〇年（昭和十五年）四月一日に、哨戒艇（第三十一号型哨戒

艇)に類別変更、同時に「第三十八号哨戒艇」と改称されることになった。

その後、海上護衛総司令部(海上護衛総隊、一九四三年十一月設立)の第一海上護衛隊に所属し、ヒ号船団の護衛任務に当たっていた^(注10)。一九四四年(昭和十九)十一月二十五日、さんとす丸指揮下にてマニラ発高雄經由基隆着のマタ三四船団を護衛し高雄に向かう途中^(注11)、米国潜水艦「アトウル」の攻撃でバシー海峡に沈んだ^(注12)。

当時の記録によれば、第三十八号哨戒艇における全体の被害は、艇長高田又男以下、准士官以上十一名、下士官以下百三十三名、軍属一名、計百四十五名の死亡となっている。ただし、十月末の記録では、乗員は准士官以上九名と下士官以下百四十二名の計百五十一名、十一月の記録では准士官以上十一名と下士官以下百四十一名の計百五十二名である。また、戦死者名簿を見たところ、「二番投射機三番」、「四番機銃長」、「五番機銃長」の名前が見えず、戦闘報告にも「哨一〇二に遭難者二名、及駆潜三三に一名収容せらる」とあり、生存者が数名存在した模様である。

四、第三十八号哨戒艇と保安堂

さて、前章でやや唐突に第三十八号哨戒艇の話を述べたのだが、これには理由がある。それは、そもそも「頭蓋骨は本当に第三十八号哨戒艇の艇長なのか」という問題である。

戦死や事故死した統治時代の日本人(本土出身者)が、台湾にて神として祀られる例は少なくない。福安宮(嘉義県東石郷)の義愛公^(注13)、鎮安堂(台南市安南区)の飛虎將軍^(注14)が有名であり、鳳山区紅毛港に限定しても、正軍堂と呼ばれる小廟も、旧日本軍兵士の遺骨とされるものを祀っている。ただし、義愛公と飛虎將軍はいずれも、実在の人物が明確に分かっている。死後、近隣住民の夢の中に登場する等、廟建立に至る経緯の中に奇跡めいた逸話が遺されているものの、保安堂のように偶然拾った遺骨が何者であるのか、霊能者の力を借りてようやく判明しているものではない。

また「第三十八号軍艦」の沈没の証拠として、廟内に保存されている碑文の写真は、天一号作戦(坊ノ岬沖海戦、大和の沖縄特攻作戦)に参加した部隊と、沖縄に配備されていた部隊名を記した石碑であり、そこに記され

ている三十八号とは「第三十八震洋隊」であり、「三八号哨戒艇」を指すものではない。そもそも軍艦とは、原則として巡洋艦以上の軍用艦艇を指す用語であり、その条件下に「三八号」の名を冠する艦艇は存在しない。仮に、「軍艦」を、軍用艦艇程度の広い意味で捉えた場合、三八号哨戒艇以外にもいくつかの候補が上がってくる。例えば「第三十八震洋隊」、「第三十八号（丁型）海防艦」、「第三十八号駆潜艇」等である。ただしいずれも「三八号軍艦」である可能性は低い^{注15}。

また、現在信じられている第三十八号哨戒艇であつても、沈没した箇所は、台湾最南端から直線距離で二百キロメートル程度離れた位置、サブタン島の至近（南部）であり、フィリピンの領海である。遺骨が潮に流された等々、奇跡を科学的な説明によって補強したとしても、強引な解釈の域を出ることは非常に難しいだろう。つまり、科学的には、「三八号軍艦」の存在自体が疑われる状態である。

しかしながら、漁民達が遺骨を祀り、その後に「大漁に恵まれたと感じた」ことは事実であり、前述の保安堂の歴史にて述べたように、その後のいくつかの奇跡（と言つてよい偶然）もあつたために、保安堂に祀られた神々への信仰が確立されている。そのため「第三十八号

哨戒艇であるのかどうか」、あるいは「第三十八号軍艦が実在するかどうか」でさえ、実はあまり重要ではないのかもしれない。漁民たちにとって、親近感を持ちやすい船乗りと船という部分に、信仰を高める要因の一つがあつたと思われるものの、極論するならば、もし神託で「私はインドの象使いである」と言つていたならば「神象」が、「マレーの虎飼い」ならば「神虎」が奉納され、同じく信仰を集めていただろう。

三八号哨戒艇との関係も、信仰上は「極めて稀な偶然が起き、それこそ神の御業、すなわち神威によつて三八号軍艦なる船の艦長の遺骨が紅毛港漁民のもとにたどり着いたのである」として、それ以上は掘り下げないでおく方がよいのであろう^{注16}。

五、おわりに

前章では、「第三十八号軍艦」の存在が疑わしいこと、そしてその疑念とは無関係に一連の奇跡が信仰の源となつてゐることを述べた。ここでは、保安堂の道教上の位置づけを簡単に述べ、本稿の終わりとしたい^{注17}。

主要な神すべてが無名の行き倒れの類というのはやや特殊といえるものの、崇り神が靈力を発揮し、地域住民

の守護神として信仰を集めることは、それほど珍しいことではない^{〔注18〕}。保安堂の場合、主祀神いずれもが我々の時代と遠くないため、ある種の違和感を抱くのではなく、「郭府千歳」の名からも分かるように、王爺信仰に代表される祟り神の一部として取り込み、供養を行なっている。また、乗り物が人格化されるのも、無生物である御座船というのはやはり希ではあるものの、福德正神（土地神の一種）と虎爺將軍（土地神の乗り物）の関係からも分かるように、違和感を感じるものではない。

もちろん、やや特殊な要素を含んでいることも確かであり、これは道教がもとと持ちあわせていた包容力であるのか、時代や地域による変化に起因するものなのかは定かではない。しかし、いわゆる典型的な変化の、更にその派生と捉えていくならば、やはり既存の枠内におさまっていると言えるのではないだろうか。

附記 本稿は、「保安堂初探——神になった船 第三十八号哨戒艇・樅型二等駆逐艦蓬」（第八回東亜漢学研究會之会、二〇一四年三月八日、致理技術学院）の内容、および、二〇一四年五月三十一日に開催された「二〇一四年国立高雄餐旅大学応用日語系「観光・語言・文学」

における発表「新観光地としての保安堂について——鳳山区紅毛港新廟群との関係から」の一部をもとに加筆修正したものである。先の発表の際、竹田健二先生をはじめ、多くの方々に貴重な御助言を賜った。記して謝意を示したい。

また、本稿執筆のきっかけは、高田哲太郎先生より、保安堂祝賀晩餐会（二〇一四年一月四日）の情報を御教示いただいたことによる。この事実を明記し、謝意を示したい。

注

（1）紅毛港の歴史に関しては以下の文献を参考に行っている。

朱秀芳・彭大維『美麗的紅毛港』青林國際出版・高雄市政府文化局、二〇〇八年三月

朱秀芳・蔣茂盛『恋戀紅毛港』青林國際出版・高雄市政府文化局、二〇〇八年四月

李億勳『紅毛港 文化故事』晨星出版・高雄市政府文化局、二〇〇六年十二月

吳連貴「紅毛港的聚落發展與社會變遷」『環境與世界』二、國立高雄師範大學地理系、一九九八年

謝貴文「論紅毛港民間故事的文化意涵」『高雄應用科技大學人

文社會科學學報」六一一、二〇〇九年七月

- (2) 筆者は、これらの廟群を便宜上、「鳳山区紅毛港新廟群」と仮に名付けている。小港区紅毛港は、六大廟宇の他、中小規模の廟が十三あり、これらの中小規模の廟に関しては、二〇一五年三月現在、鳳山区への移転が完了しているわけでは無い（移転計画があるにも関わらず仮廟すら無いものもある）。また、住人移転前から存在する廟もあるため、移転が完了するならば、総数では、（私人壇を除いても）三〇近い廟が同一地域に集中して存在する計算になる。なお、鳳山区紅毛港新廟群全体の調査に関しては、別稿にて公開する予定である。
- (3) 「簡介」では「竹寮」を造って祀ったとある。

劉枝萬氏は、「廟寺の成長」〔台湾の道教と民間信仰〕風響社、一九九四年、一二八―一三二頁）において、廟の発展に関して、「無廟」「草寮」「小祠」「公厝」「小廟」「中廟」「大廟」の七段階に分けている。先の「竹寮」は劉氏の分類では「草寮」に相当すると思われ、「祠」の前段階の「掘っ建て小屋」のような建造物とする方が、あるいはふさわしいのかもしれない。

(4) ある台湾のテレビニュースでは、網に入った頭蓋骨をいったん捨てたが、また網に入ったために持ち帰ったとしている。しかしながら、廟が公開するなどの簡介とも異なり、また、海難者の遺骨を棄てることは、船乗りの習性からも考えられない（他者の遺骨を棄てることは、己もまた海難事故に遭い遺

骨を拾われた際に供養してもらえないことを容認することになる）。後述の神像の材料となる樟木の逸話と混同、ないしは神秘性を演出するためにテレビ局によって編集がなされた可能性が考えられるため、筆者はこの説を取らない。なお、民国十二年時に頭蓋骨二つを拾ったとする台湾情報ブログの記事等もあるが、これは、「郭府千歳」（大腿骨）と混同し、二つとしてしまっているものと考えられる。

- (5) 海洋ゴミの類で三度捨てても網にかかる場合は、霊験があるとして持ち帰るしきたりとのことである。

(6) 童乩が語ったとされる日本語の記録は残っておらず、その内容とされる中国語の解説のみが現存している。また一説にはオオタと名乗ったという。

(7) 「海府尊神」から「海府大元帥」への改名は民国七十九年である。軍人であることが童乩により判明したため、軍隊の最高位の称号「元帥」に「大」を加えたものに変更したと考えられる。しかし、道教の神位上の呼称としては降格している。

(図5 A・B)



図5 A 「海府尊神」小神像（画像中央）



図5 B 「海府尊神」小神像の台座（拡大）

(8) アジア歴史資料センター (<http://www.jacar.go.jp>)

「昭和十九年二月七日～昭和十九年十一月二十五日 第三十八号哨戒艇戦時日誌戦闘詳報 (三)」(第三十八号哨戒艇戦時日誌 —昭和十九年八月一日～九月三十日、「昭和十九年十一月一日～十月三十一日」、「昭和十九年十一月一日～十一月二十五日」、「第三十八号哨戒艇戦闘詳報 —昭和十九年十一月二十五日対潜戦闘」(昭和二十年一月十六日報告))

「昭和十九年六月一日～昭和二十年六月三十日 第一〇二号哨戒艇戦時日誌戦闘詳報 (三)」(第一〇二号哨戒艇戦時日誌 —昭和十九年十一月一日～十一月三十日、「昭和十九年十二月一日～十二月三十一日」)

「昭和十九年八月一日～昭和十九年十一月三十日 第一海上護衛隊戦時日誌 (四)」(第一海上護衛隊戦時日誌 —昭和十九年十一月一日～十一月三十日)

(9) 『世界の艦船 —日本駆逐艦史』(増刊四五三号、海人社、一九九二年七月)

木俣滋郎『駆逐艦入門 —水雷戦の花形徹底研究』(光人社、二〇〇六年七月)

木俣滋郎『小艦艇入門 —海軍を支えた小艦徹底研究』(光人社、二〇〇八年一月)

(10) 東インド、フィリピン方面の一連の護送船団であり、一九四三年(昭和十八)七月に第一号船団が発発している。

(11) 第三十八号日誌ではマタ二三、護衛隊日誌ではマタ三四船団となっている。「タマ(台湾発マニラ行)」は奇数番、「マタ(マニラ発台湾行)」は偶数番になるため、「三四船団」と判断。

(12) 米海軍側の資料とも一致している。

(13) 義愛公とは、一八九七年(明治三十)、現地に赴任した森川清治郎巡査が神格化したものである。一九〇二年(明治三十

五)、住民の事情を斟酌し税金の軽減を総督府へ願ひ出るが、懲戒処分を受け自決する。片倉佳史「義愛公」(『台湾に生きている「日本」』、祥伝社新書、二〇〇九年三月)に詳しい。

(14) 飛虎將軍とは、一九四四年(昭和十九)十月十二日の米軍による台南・高雄への空襲の迎撃に参加した杉浦茂峰が神格

化したものである。この空戦で撃墜され戦死するが、現地では集落への損害を防ぐために民家を避け、畑へ墜落したと信じられている。

(15) 第三十八震洋隊とは、保安堂内に飾られている記念碑の写真に記されている艦艇である。震洋は爆薬を積んだ小型（一（二名用）の特攻専用モーターボートであり、保安堂の信者が想定している規模の艦艇ではない。

第三十八号（丁型）海防艦は、一九四四年十一月二十五日、マニラ西方にて米潜「ハードヘッド」により沈没している。末宗勲「船団防衛 海防艦戦一筋」（平和祈念事業特別基金編『軍人軍属短期在職者が語り継ぐ労苦』五、一九九五年三月）参照。

第三十八号駆潜艇は青島で終戦を迎えている。

その他、伊号第三十八潜水艦（一九四四年十一月十二日にヤップ島沖にて米軍駆逐艦「ニコラス」により沈没）、呂号第三十八潜水艦（一九四四年一月二日ギルバート諸島方面で喪失認定）等がある。

(16) 実は、「第三十八号掃海艇」というものもあり、一九四四年十一月二十日に高雄の南西沖で米軍潜水艦「アトゥル」により沈没している。単純な確率論で言えば、この船である可能性がより高いのだが、その指摘は科学的に意味を持たない上、信仰上にも混乱を引き起こすだけであろう。

なお「鳳山区紅毛港新廟群」全域の調査の際、保安堂を拠点としていたため、廟の役員達と顔なじみとなり、私的なバーキョーパーティーに誘われる等、調査者としての立場を越えてしまっている。そのため、保安堂内の記念碑の写真のことも含め、廟の役員に伝えられないでいる。

(17) 台湾では、こうした廟の類を中国（大陸）の道観のように「道教の宗教施設」と明確に認識しているわけではない。いわゆる道教を中心に土着の信仰や儀式等を含め、民間信仰として大きく分類している。本稿もその緩やかな基準に則る。

(18) 日本では、菅原道真、平将門。中華圏ならば閻羽等、枚挙に暇がない。